

## 両性の平等という問題への序章 —— プラトン『国家』第5巻, 449a1-457b6 ——

藤 澤 郁 夫  
(平成8年10月22日受理)

### 要 旨

プラトンの『国家』は、いわゆる積残し問題の入り口に、両性の平等という主題を描いている。妻子の共有から哲学者王という驚くべきかつ深刻な議論への序章をなす重要な前提として、守護者になるべき人間の選定作業に登場する両性の平等という問題構成は、西洋におけるいわば最初のフェミニズム (Ur-Feminismus) とも言われてきたように、ラディカルなかたちでその趣旨を提示している。なるほど守護者の選抜は苛酷な程に峻厳であり、その生活様式は私有財産の全面的禁止はいうに及ばず、寝食を共にする共同生活など、今日の我々の日常の光景からは少しく距離を感じさせるものではあるが、素質に依拠する一人一芸論をもって国家建設の根幹となすプラトンの構図において、こと守護者の任務・仕事の配分に関するかぎり、プラトンは徹底的に共通主義 (平等主義) を貫いている。その徹底ぶりに付随する若干の特殊歴史的な手古摺りはその都度その歴史的空間において不可避ではあろうが、プラトンによる上の結論導出の論理は、今日の我々にとってもいわば原型的な規範性をもちうるのではなかろうか。小論はその導出過程を正確に辿ることを執筆意図としている。

### KEY WORDS

physis	自然本性の素質	koinei prattein	共通主義
dialektos	対話	to gynaiikon genos	女性

### 1 いわゆる積残し問題

『国家』第4巻での話の進行は、じつは重大な積残し問題を抱えていた。こうした事情を容赦せずに指摘する役割をポレマルコスに担わせるところに、いわゆる積残し問題のポレミカルな性格が暗示されているだろう<sup>(1)</sup>。じっさい、守護者の教育プログラムの概要が語られた段階で、プラトンはソクラテスに次のように言わせていた。「じじつ、もし彼らがよく教育されて適正を知る人間となるなら、これらすべてのことや、妻女の所有 (共有) とか、子づくりといったような、我々がさしあたって積み残している問題 (hosa nyn hemeis paraleipomen) もまた容易に理解するだろう——これら [妻子] はすべて、諺に言われているように、できるだけ『友のものは共のもの (koina ta philon)』としなければならないという問題のことだ」<sup>(2)</sup>と。つまり、いわゆる積残し問題とは、さしあたって言えば、妻子の共有問題のことであった。そして、

---

\* 社会系教育講座

この妻子の共有問題はプラトンの『国家』のなかで、その問題の困難性と沸き立つ異論・反論を踏まえ、いわば「大浪 (kyma)」と表象された訳である<sup>(3)</sup>。

ところで、妻子の共有 (koinonia) などという、当時の市民の常識からも遠く隔たった——いや、それどころか現代の我々の常識からも程遠い——思想は、そもそもそうしたことが実現可能なのであろうか (hos dynata = ei dynata)、そして、かりに実現可能であるとしても、それは最善といえるのかどうか (hos arista = ei airista)、という二つの問いに直面しなければならない<sup>(4)</sup>。そして、この二つの問いは積残し問題を三つの局面に分節する役割を果たしている。一つの局面は、守護者となるべき人間たちへの仕事の配分において男女は平等であるべきだという主張。第二番目には、妻子は共有されるべきだという主張。そして、この第二の主張の実現可能性と最善性を裏付けるべく要請されてくるのが第三の局面だということになる。それは、いわゆる哲学者王という理念が壮大に語られる問題状況である。これらの諸局面は相互に緊密に関連し合っているばかりか、問題の困難さの度合いという観点からも、漸次的な移行を促すような関係にある。言い換えると、大浪の規模から言えば、両性の平等という問題場面から、漸次、大浪はその苛烈さを加え、哲学者王の理念において「その規模は最大にして最も困難なもの (to megiston kai chalepotaton)」<sup>(5)</sup>となるのである。この第三の局面において、上の二つの問いはその臨界に達しており、「そもそも語られたことは、そのとおり実現 (実践) されうるものなのか」<sup>(6)</sup>と苦吟するプラトンの言葉のうちに、その間の事情はよく表れているように思われる。

従って、小論が扱う両性の平等という問題は、妻子の共有という大きな問題へのいわば序論という性格を担っている。その位置から窺えるように、両性の平等という問題は実現可能性と最善性という先の二つの問いに対して、より直接的に対峙しているように思われる。なぜなら、それは国家建設を主導する、各人の自然本性ないし素質 (physis) に従った「一人一芸論」という根本原則に直接的に対峙し、かつまた、守護者の教育プログラムの善し悪しに直接的に対峙するからである。その意味からいえば、両性の平等という問題において、我々はプラトンの国家建設の理念の正当性が検証される最初の機会を与えられているだろう。

## 2 配分的正義と素質 (physis)

そもそも男の守護者たちに話を限定した場合、彼らに要求された生活規範とはどのようなものであったか。絶えず反復される比喩系において、国家とはいわば羊の群れ (poimnion = poimne) であって、羊飼いは支配者、羊飼いを補助する犬は補助者 (戦士)、羊はこれら前二者を除く市民 (国民) である。当然のこと、この比喩系は、羊をねらう狼 (lykos) を含む<sup>(7)</sup>。羊飼いと犬が協力して羊を狼から守るように、補助者と支配者は協力して国を守護することから、彼らは守護者 (phylax) と総称される。守護者はしかるべく選定された場所において、夏の暑さと冬の寒さを防ぐ住居を与えられるが、それは基本的には「軍人のための住居 (stratitikaioikeseis)」<sup>(8)</sup>である。羊飼いと犬が絶えず狼とは戦争状態にあるように、守護者もまた仮想の敵と戦争状態にあるだろう。したがって、守護者たちはいわば野戦でキャンプを設営する独立の部隊なのであり、寝食を共にする——共同食事 (syssitia) と共同生活 (koinei zen) をする<sup>(9)</sup>——のは自明の前提であった。プラトンの依拠する比喩系に伏在する問題は少なくないと筆者

は考えるが、しかし、ことの善悪を論じる前に、プラトンの前提そのものを正確に把握しておく必要があるだろう。

以上のような生活様式からいえば、まず所有に関して、私有財産 (ousia idia) が全面的に禁止されたことがあり、国家守護の任務に対する報酬として (misthos tes phylakes) 兵糧 (tapitedeia) が保証されたことがある<sup>(10)</sup>。報酬としての兵糧保証ということの意味は重要である。なぜなら、この場合の報酬とは、国家守護という労働への報酬なのであって、守護という知識・技術がもっている社会的価値への正当な配分という意味をもつからである。これは、守護者がみずから数多の試練に打ち克って手中にした社会的評価であり、その評価によって配分された報酬だからである。ここには配分的正義がある。しかし、この配分的正義の観点からいえば、彼らには商業活動の自由も不動産所有の自由も私有財産の所有も許されていない。したがって、彼らに即していえば、通常の意味での配分的正義は完全に断念されている。それにもかかわらず、この不足を補って余りある配分が実は彼らにはあったのである。それは、素質 (physis) の配分である。「彼らはその魂の中に、天与の神的金銀をつねにもっているのであるから、このうえさらに人間世界の金銀を何ら必要としないし、それに、神的な金銀の所有をこの世の金銀の所有によって混ぜ汚すのは敬虔なことではない」<sup>(11)</sup>のである。

かくして、守護者に要請された生活規範の正当性は、かれらの自然的素質が国家守護という仕事に適合するという意味での正義だったのであり、自らの支配者としての素質を純粋に顕在化した人間についての配分的正義だったのである<sup>(12)</sup>。ここに後天的な社会的評価と先天的な素質という価値次元の混同を見ることは容易だが、ことはそう単純ではない。なぜなら、実はこの素質なるものは、強いられた労苦や苦痛や競争によって絶えず試され選抜されながら、「子供のときも、青年のときも、成人してからも、たえず試練を受けながら無傷のまま〔純粋なかたちで〕抜け出した者 (akeraton ekbainonta)」<sup>(13)</sup>が実生活のなかで実現した「素質」のことだからである。従って、素質はむしろ天与の金に違いないが、それはまた百戦錬磨の実効ある金でもある。それは、国を守護する力としての価値を唯一実現している金に他ならない。他方、守護者以外の一般市民には自由な経済活動が許される。もし守護者が世俗の価値に未練が残り、「自ら私有の土地や、家屋や、貨幣を所有するようになるときは、かれらは国の守護者であることをやめて、家産管理者 (oikonomoi) や農夫 (georgoi) となる」<sup>(14)</sup>だろう。プラトンの構図においては、守護者は自らの自然的素質を磨き抜くことによって自らの仕事に専念する (prattein ta heautou) とし、そしてその場合にかぎって、彼はある正しさに与りうるのである。

素質に関して選別の論理がこれほどまでに強調される背景は何であろうか。国家の発生因は、プラトンによれば、個人が自給自足できず多くのものに不足していることによる。仲間や協力者を必要とするがゆえに我々は共同居住 (synoikia) としてのポリスを必要とする。そして生活の必要を一人の人間が多芸を演じて実現できるほどに人間は有能ではない。つまり、必要最小限の国家においてさえ、その必需品の供給 (chreias paraskeue) を分業という仕方では達成する他はない。そして、まさにこの分業という社会制度を側面から支援する論理として、素質論の登場の必然があった。したがって、以上の点を考慮すると、ここでいう配分的正義は、世俗の財や天与の財の適正な弁別と整理という側面と、素質の適性に従った正しい分業という側面との、両面を覆うという意味での正義となるであろう。

### 3 共通主義 (koinei prattein) と家庭内主義 (oikourein endon)

「そもそも、我々が詳述したような生まれと教育を受けた〔守護者としての〕男にとって、子供と女を彼らがどのような仕方でもち、どのように関係すべきかについては、このぼくの見解では、彼らは我々が最初に与えた動きに従って行くよりほか、その正しい道はありえない」<sup>(16)</sup>。ここでは、男の守護者にとっての、妻子の所有 (ktesis) と妻子への関係 (chreia) が問われる。では最初の動き (horme) とは何であったか。それはとりもなおさず、「ところで、我々が試みたのは、言葉のうえで、そのような人々をいわば羊の群れを守る番人の役につけるということだったはずだ」<sup>(16)</sup>という再確認をとおして、あの反復される比喩系へと回帰することであった。いまこの比喩系において問われるべきは、「番犬のうちの女の犬たちは、男の犬たちが守るものと同じものを共通に守り、共通に獲物を追い、また他の仕事も共通に分担しなければならないと、我々は考えるのだろうか、それとも牝犬のほうは、仔犬の出産と子育てのためにそうした仕事はできないものとして、家のなかにいるべきであり、牡犬が骨折り仕事や羊の群れの世話をいっさい引き受けなければならない、と考えるのだろうか」<sup>(17)</sup>であろう。

これは要するに、一方にいわば共通主義 (koinei prattein) を措き、他方に、女性は出産と子育て (tokos te kai trophe) を専らとして男性のする仕事はできないものとする、いわば家庭内主義 (oikourein endon) を措く、二項対立の図式であろう。とはいえ、こと守護者の生活様式を考慮すれば、そもそも彼ら男性の守護者たちは通常の意味での家庭を営むことはないのであり、女が入るべき家庭をもたないのだから、こと守護者に関係する女にかぎって言えば、はじめから家庭内主義という選択肢は存在しないことになるだろう。しかし、この二項対立は当時の市民生活の実態に即して言えば、家庭内主義がいわば標準モデルであって、共通主義は極めて例外的なモデルであったことは想像に難くない。こうした事情を考慮すれば、一般論としては依然として有効な対立であったはずである。いっぽう、しかし、アリストテレスが『政治学』第2巻第5章で行なった、「動物と比較して、女も男と同じことをしなければならないと類推するのも奇妙なことである。なぜなら、動物には家政 (oikonomia) というものは何もないからだ」<sup>(18)</sup>との批判は、プラトンの構図での守護者には当てはまらないことも事実である。なぜなら、守護者にも家政というものは何もないからである<sup>(19)</sup>。プラトンにおいて回帰してくるあの比喩系を無効な類推 (parabole) と断ずることは、守護者の生活様式の特異性を考慮するならば、早計に失するのである。

かくして、上の二項対立は、共通主義にコミットするという仕方では決着される。即ち、「すべての仕事を共通に分担しなければならない。ただし、女を体力的には弱いものとして処遇し、男は体力的に強いものとして処遇するという点は除くものとする」<sup>(20)</sup>のである。では、共通 (koinei) というものの意味は何であろうか。それは他でもない、「国を守る (phylattein)」という目的を共通にもつということであろう。言い換えると「同一の目的 (epi ta auta)」<sup>(21)</sup>を分かち合うという意味で共通なのである。そして、同一の目的をもつ以上、共に「同一の養育と教育を与える」<sup>(22)</sup>必要があるだろう。つまり、「女も男も同じ目的のために使おうとすれば、女にも同じことを教えなければならない」<sup>(23)</sup>。したがって、共通主義は、目的と教育の間の目的・手段連関を同一性という契機によって有機的に統合しながら、両性をかぎりなく平等に処遇しようという努力 (horme) のうちにその生命をもっている、と言えるだろう。

しかし、目的の同一性が共通主義を貫徹するとき「習慣に反した数々のおかしなことが現われる」<sup>(24)</sup>ことも想像に難くない。なにしろ、国家守護に関する一切の仕事が両性によって平等に分担されなければならないことになれば、守護者となるべき女は音楽・文芸や体育を学ばねばならないばかりか、「戦争に関する諸事万般 (ta peri ton polemon)」<sup>(25)</sup>に至るまで、男と共通に教育・訓練されなければならないからである。「女たちが裸になって、レスリング練習場で男たちと一緒に体を鍛練する」<sup>(26)</sup>ような情景が、共通主義を好ましく思わない守旧の連中の格好の攻撃目標となったのは言うまでもない。プラトンはソクラテスに「無知で劣悪なものの姿以外のなんらかの光景に目を向けて、それをおかしいと見てもの笑いの種にしようとする者は、逆に美しいものの基準を真剣に求めるにあたっても、善いものを基準とせず別何かを目標として立てるものだ」<sup>(27)</sup>という台詞を配して、守旧派には一步も譲らない気配だが、女性の羞恥心に関する歴史的文化的相対主義が当時のアテナイで主流を占めたとする証拠はないのである。こうして、女性の羞恥心を含めて、共通主義が克服しなければならない反論は数多かったし、「嘲笑 (skommata)」<sup>(28)</sup>と「議論という蜜蜂の群れ (hesmos logon)」<sup>(29)</sup>が、他に別して「優雅を気取る連中 (charientes)」<sup>(30)</sup>と「都会派を気取る連中 (asteioi)」<sup>(31)</sup>から出された背景を考慮するならば、両性の平等という問題を整理する過程で、プラトンが争論 (eris = eristike) ないし反論術 (antilogike) という不毛な議論に対抗して、事柄の真実を生産的に確保するための手法を、いわば方法論的な自覚のもとに対話 (he dialektos) という概念に析出したという事実到我々は注意を向ける必要がある。論争問題が事柄としての確に確保されることはもとより、それに劣らず必要なのは、論争そのものが明確な方法論的な自覚のもとに生産的で合理的なものとならなければならない、ということである。

#### 4 争論 (he eris) と対話 (he dialektos)

各人が自分の自然的素質に合致した一つの仕事に専念すること（一人一芸論）が、国家建設のいわば大原則をなすようなプラトンの構図において、国家守護という同一の目的に組み込まれた両性が、はたしてそれぞれの性の自然本性において、共通主義を可能にする状況にあるのであろうか。次に問われるべきはこのことであろう。即ち、「いまの問題についてまず第一に意見の一致を求めなければならないのは、はたしてそれが実現可能か否か (ei dynata e ou), ということではあるまいか」<sup>(32)</sup>。共通主義は、国家守護という同一の目的から、守護者となるべき両性の同一の教育、同一の仕事の分担を主張している。この主張は両性のそれぞれの自然本性に合致するのであろうか。我々はごく形式的に「そもそも人間としての女の自然本性（素質） (physis he anthropine he theleia) は、あらゆる仕事を男と共通に分担することができるものなのか（全部肯定論）、それとも、何一つとしてそれは不可能であるのか（全部否定論）、それとも、ある仕事については可能だがある仕事については不可能であるのか（部分肯定論＝部分否定論）」<sup>(33)</sup>という都合三つの主張を類別化できるだろう。結論を先に言ってしまうと、プラトンは共通主義に全面的にコミットするところの、共通主義に関しての全部肯定論者だということになる。従って、プラトンの側からすれば、全部否定論から部分肯定論に亘る各種の反対論を相手にしなければならないのである。

例えば、「戦争に関する仕事は女には不可能だ」<sup>(34)</sup>と主張する人は、穏健な部分否定論者であ

ろう。このような部分肯定論ないし部分否定論はさまざまなニュアンスをもって歴史相対的に——かつまた、個人的な感覚や趣味にも影響されて——現われるものなのであって、時代が宿す常識枠ないし概念枠のなかで多彩にその変種を形成するだろう。むしろ、理論的な興味からいえば、プラトンの素質論に鋭利に関わるタイプの反論が重要性をもつだろう。このタイプの反論はこう論じる。「君たち自身が、君たちの試みている国家建設の始めにおいて《人はそれぞれもって生まれた自然本来の素質 (physis) に応じて、一人が一つずつ自分の仕事をしなければならない》ということに同意していた。しかるに、女と男を較べれば、その自然本性の素質 (physis) において大いに異なっているというのが実情ではないか。そうだとすると、男と女のそれぞれに与えるべき仕事も、それが自分の自然本性の素質に応じたものであるとすれば、当然のこと別々の仕事となるはずではないか。それなら、君たちがいま言っていることは間違っているし自己矛盾だということにならざるをえない。なぜなら、君たちはこんどは逆に、男も女も、それぞれの自然本来の素質がまったくかけ隔たっているにもかかわらず、同じことをしなければならないと主張しているからである」<sup>(35)</sup>と。

一見、上の反論はまともなようで、「同一でない自然的素質は同一の仕事に携わってはならないという命題を、ただ勇ましく争論家風に、ただ言葉の上だけで追い求めている」<sup>(36)</sup>のだとプラトンは反駁を加える。ここに言われる争論 (he eristike) ないし反論術 (antilogia, antilogike) が不毛である所以のものは何であろうか。「彼らは論題になっている事柄を、その種類に従って分割して (kat'eide diairoumenoi) 考察する能力がなく、ただ言葉だけを孤立させて相手の論旨を矛盾に追い込もうとするからなのであって、その場合お互いに行っているのは、ただの争論 (eris) であって対話 (dialektos) ではない」<sup>(37)</sup>とプラトンは主張する。しかし、この説明だけでは、争論と対話の違いはまだはっきりしない憾みがある。そこで、我々は争論の具体例として、次のような議論を提出しよう。「禿頭の人と長髪の人とでは、[男性である点で] 自然的素質は同じではあっても、また反対の素質でもあるのではないかと。そして、もし我々が反対であることに同意するならば、禿頭の人たちが靴作りをすれば長髪の人たちにはその仕事を許さないのか、あるいはまた、長髪の人たちに靴作りを仕事とするなら、他方の禿頭の人たちにはそれを許さないのか、と」<sup>(38)</sup>。この具体例において、「素質の相違」という類概念 (genos) から種概念 (eidos) へと下降する過程で、「禿頭と長髪という相違」という種概念 (eidos) は、適切にして妥当な種概念の分割になりえているのだろうか。ここでの種類 (eidos) とは、「靴作り」という事柄に即して (kat' auto to pragma) 分割されたものでなければならない。明らかに、「禿頭と長髪という相違」は、事柄「靴作り」に関係する種概念としては無意味で不適切なものであろう。すると、対話でありうるための要件としては、全体の脈絡から孤立した言葉ではなくて事柄そのものが確保されること (kat' auto to pragmata), 論題になっている事柄を、その種類に従って分割することが挙げられるだろう。後者の要件は、「素質の異同」という類が、何に関係するものとして限定されるのかという論点である。言い換えると、「素質の異同」が「靴作り」に関係するものとして限定され規定されて、その事柄に適切な「種 (eidos)」が分割されるということである。従って、種の分割は「その素質の異同ということをとくに何に関係するものとして規定したのか (pros ti teinon horizometha)」<sup>(39)</sup>を問うことなしには遂行されえないのである。

かくして、国家守護に携わる両性において、その自然的素質 (pysis) は、「専ら当のその[国家守護という]仕事そのものに係るような種類の相違と類同だけ」<sup>(40)</sup>が考慮されなければ

ならない。そうであるならば、我々の次なる探求は、人間的素質が国を守護する仕事に関係して規定され限定され分割されるとき、その分割の作業とはどのようなものであり、かつまた、そこに現出する素質差という種類(eidos)において、両性の相違はどれほどの意味をもつのか、でなければならない。

## 5 仕事の配分において機能する素質差とは何か

男性 (to andron genos) と女性 (to gynaikon genos) とがその自然的素質において異なるということの意味を「女は子供を生み男は交尾するという、ただそのことだけが両性の相違点であるように見えるならば、それだけの相違点ではまだ、我々が問題としている点に関して女が男と異なっているということは、証明されたことにはならないと主張すべきだろう」<sup>(41)</sup>。問題は、ある仕事なり技術に関係して、自然の性差は有意差でありうるか、である。対話(he dialektos)という手法が我々に示したことはそのことである。したがって、いまやプラトンが反対論者にさらに問い糾すべきは、「そもそも国を設営してゆく上でどのような技術、どのような仕事に関して、女と男の自然本来の素質 (physis) は同じでなくて異なるのか」<sup>(42)</sup>となるであろう。言い換えると、「ある仕事なり技術なりに向く素質があること (euphyes pros ti einai) とないこと (aphyes pros ti)」<sup>(43)</sup>と区別する指標は何であるのかが問われなければならない。

プラトンにおいては、ある仕事への素質のあるなし、向き不向きは、三つの指標において識別される。「素質のある人はそのこと[仕事なり技術なり]を容易に学ぶのに対して、他方は難渋して学ぶ」<sup>(44)</sup>というのが第一指標。「素質のある人は僅かの学習から多くのことを発見する (poly heuretikos) (一を聞いて十を知る) が、素質のない人はたくさん学習しても学習したことが覚えられない」<sup>(45)</sup>というのが第二指標。「素質のある人にとっては、肉体が精神に十分に仕えるのに対して、素質のない人にとっては逆に[肉体は精神を]妨げる」<sup>(46)</sup>というのが第三指標。即ち、これを要するに、ある仕事なり技術に対する素質があるとは、(1)それを楽々と容易に学ぶことができる能力をもっている、(2)僅かな学習から多くの発見へと自己を創造的に発展させてゆく能力がある、(3)肉体と精神はよく協力関係を維持して学習の実をあげうる能力がある、ということである。これに対して、ある仕事なり技術に対する素質を欠いているとは、(1)学習が難渋して時間と労力——これは学習する側にも教える側についても言えるだろう——がかかりすぎる、(2)学習や練習の機会を多くもっても覚えられないし——まして、発見的文脈を創造することから程遠いだろう——、学習内容も理解できない、(3)種々の理由から、肉体が精神をサポートする能力に欠ける、ということである。

かくして、上の対話 (he dialektos) という方法 (methodos) によってプラトンが達している結論は、素質の相違という類概念(genos)に関して、国を守護する仕事という事柄(pragma)に関係して、類概念に種差 (diaphora) を加えつつ種概念 (eidos) を規定し限定し分割するかぎり、「女であるがゆえの女の仕事、また、男であるがゆえの男の仕事などというものは何もない」<sup>(47)</sup>という、驚く程に徹底した共通主義であった。あえて、留保というべきものを言挙げするならば、「両性には同じように自然本来の素質が散布されていて (diesparmenai)、女も男もそれぞれの素質に応じて (kata physin)、どちらもあらゆる仕事に与かりうるが、ただ何事につけ女は男よりも弱い」<sup>(48)</sup>という論点だけであり、この違いは程度の問題にすぎず——なぜなら、

ことを選ばず女より弱い男は少なくないから——、少なくとも定性的な相違とは認められていない。この章の結論をもう一度プラトンと共に繰り返そう。「したがって、国家を守護するという仕事に必要な自然的素質そのものは (he aute physis), 女のそれも男のそれも同じだということになる。ただ一方は比較的弱く、他方は比較的強いという違いがあるだけ」<sup>(49)</sup>なのである。プラトンの共通主義はその適用範囲が守護者となるに相応しい少数のエリートに限られているとはいえ、両性の平等という問題に対して一つの筋道をつけはしたという意味で、今日もお規範的な意義をもち続けているであろう。

## 6 共通主義の実現可能性と最善性

かくも徹底した共通主義を語りえたプラトンの勇気と見透しにはただただ圧倒される思いだが、しかし、彼にも何程かの逡巡がなかった訳ではない。なぜなら、プラトンはソクラテスの口を借りて、やや執拗とも思われる自己防衛にもこれあい努めているからである。即ち、こうした主張をしたとて「そもそも実現可能なことが主張されているとは信じてもらえないだろうし、かりになんとか実現したところで、それが最善であるかどうかという点になると、信じてもらえないだろうからだ」<sup>(50)</sup>と弁解するいっぽう、「そういう話は祈り (euche) と思われはしまいか」<sup>(51)</sup>と危惧するさまもことさら隠し立てしないからである。そして、そうした心の状態を「確信もなくかつまた探求の途上にある (apistounta de kai zetounta hama)」<sup>(52)</sup>という言い方で表現している。このプラトンの逡巡は何を物語るのか。それは、いわゆる積残し問題の深刻さの反映であり、しかも、その主要問題が「妻子の共有」から端を発した「哲学者王の理念」にあったことに因るのではなからうか。ところがしかし、思うに、積残し問題の初発に位置する「両性の平等という問題」に関する、実現可能性 (hos dynata = ei dynata) と最善性 (hos arista = e arista) に関して、プラトンの態度は「確信もなくかつまた探求の途上にある (apistounata de kai zetounata hama)」<sup>(53)</sup>ようには見えず、むしろ一定の理論的確信すら感じさせる趣がある。なぜなら、後二者の問題に関する実現可能性について、プラトンの説明は難渋を極めるのに対して、初発の問題に関しては、プラトンの実現可能性と最善性の説明は直接的にして率直でありかつ明快であり、この差は筆者には僅少とは思われない。

まずもって、女が男と共通の仕事を分担しうるという議論は、当事者たる女において「素質がその任に十分であり (hikanai), 男たちと生まれを同じくしている (syggeneis)」<sup>(54)</sup>という事実<sup>(55)</sup>に依拠している。言うまでもなく、素質の十分条件は先に挙げた三つの指標によって構成される。ここでは、女であれ男であれ、ある仕事ないし技術に対する適性という意味での素質だけが決定的要因なのであって、それ以外の偶有性は一切度外視される。したがって、共通主義の要求が実現可能であることの根拠は、挙げてその要求が人間の自然本性という意味での素質 (physis) に合致するという事実<sup>(56)</sup>に求められる。即ち、「我々が立法しようとしている事柄は、けっして実現不可能なことではなく、いわば祈りのようなものでもなかった。なぜなら、我々の意図していた立法が自然本来のあり方に合致している (kata physin) からだ。むしろ、現在行なわれているこれとは違ったやり方こそ、自然本来のあり方に反している (para physin) ように思われる」<sup>(57)</sup>とさえプラトンは言っている。十分条件は経験的事実によって検証可能であるという意味で、即ち、共通主義の要求は自然本来のあり方に合致しているという事実によ



て、その実現可能性は根拠づけられたと言うべきであろう。

では、共通主義が掲げる要求が最善であるかどうかという問題はどのように処理されているのだろうか。この場面でもプラトンの語り方は率直であり明快である。「国を守護する仕事に適した女を作り上げるという目的に関するかぎり、我々にとって、男たちを守護者にするための教育と、女たちのための教育とが別々のものであるはずはない。というのも、同じ素質(*he aute physis*)が教育に委ねられる」<sup>〔56〕</sup>のだからである。即ち、生成の目的(*pros to genesthai*)の同一性と教育プログラムの同一性という主題は、すでに小論において取り上げられた話題であるが、ここでもう一度その連関が確認されたということである。したがって、共通主義の要求が最善であることを言うためには、守護者の教育プログラムが最善であることを言うのと選ぶところがないということになるだろう。

国を守護するという目的に照らして、「まさにこの任務に適した自然的素質が必要とされる」<sup>〔56〕</sup>が、こうした素質が陶冶されてしかるべきエートスを獲得するとき、守護者は勇気のある知を愛する人間となる。つまり、「我々にとって、国家のすぐれた立派な守護者となるべき者は、その自然本来の素質において(*ten physin*)、知を愛し(*philosophos*)、気概があり(*thymoeides*)、敏速で(*tachys*)、強い(*ischyros*)人間であるべきだということになる」<sup>〔57〕</sup>のである。言い換えると、国家守護という任務は一定の素質を要求するのであり、そういう意味で守護者となるべき人間の自然的素質が象られたのを承けて、いよいよ守護者の教育プログラムが語られる。したがって、プラトンが示した教育プログラムは、守護者となるべき人間における自然本来の素質(*physis*)を最善に導こうという意図においてプログラムされていることは明らかだと言わねばならないだろう。少なくともプラトンの意図においてそうである。とすれば、最善性の問題(*hos arista = ei arista*)もまた、その根底において、人間の自然本性に合致した教育プログラムであることをもって、その理論的根拠をなしているのである。プラトンが提示した教育プログラムが最善であるかどうかは依然として問題적でありうる。しかし、その問題が残るとしても、最善性の論拠が人間の自然本性に基づく教育という発想にあることだけは疑えないし、またそのかぎりでは、実現可能性の論拠に重なってくるのも事実であろう。

かくして、積残し問題の入り口において、即ち、両性の平等という大浪において、その実現可能性についてもその最善性についても、結局のところプラトンが論拠とすべく立ち還った場所は、人間の自然本性(*physis*)という場所だったのであり、その意味では、共通主義の要求は純粹に人間本性論的な論拠からの構成であったと思われる。達している結論については、例えば加藤は慎重な言い回しながら、「現代の諸国でこのプラトンの理想国の教育システムがある程度まで実現されつつあるのを見るのは面白い」<sup>〔58〕</sup>としてプラトン思想のもつ歴史的意義に言及しているし、いまは亡きヴラストスは『『国家』第4巻から第7巻でその概略が示された理想国においては、守護者と呼ばれる国を治めるエリート的女性たちについてプラトンのとっている立場は、紛れもなくフェミニストである」<sup>〔59〕</sup>と明言するなど、少なくとも如上の問題にかぎって言えば、現代のフェミニズム批評のなかで好意的に解釈される現状にあるだろう。しかしプラトンはこの問題だけを語ったのではない。我々はまだ積残し問題への一歩を踏み出したにすぎず、さらなる大浪が我々を待ち受けていることを忘れてはならないだろう。

## 注

- (1) このような劇的効果を示唆する箇所としては、cf. Plato, *Respublica*, 449b1-6.
- (2) *Ibid.*, 423e4-424a2.
- (3) cf. Plato, *op. cit.*, 457b7-8. 大浪のイメージは「しかし、これが実情なのだ。人は小さなプールに落ちようと、大海のまっただなかに落ちようと、とにかく泳ぐことには少しも変わりはない」(*ibid.*, 453d5-7)という言い方で予示されていたが、やがて三つの大浪という問題群として確定される。
- (4) Plato, *op. cit.*, 450c8-9.
- (5) *Ibid.*, 472a4, 473c6-7.
- (6) *Ibid.*, 473a1.
- (7) この比喩系は反復されるが、キャラクターを揃えて言及される箇所としては、Plato, *op. cit.*, 416a2-7を指摘しておきたい。なお、羊の群れを表す言葉は‘agele’も使用される(cf. 451c7-8)。
- (8) Plato, *op. cit.*, 415e9.
- (9) *Ibid.*, 416e3-4.
- (10) *Ibid.*, 416d4-e3. 支配者たちとその補助をする兵士たちが、彼らの民衆への奉仕に対して報酬を与えられたということは、民衆は「給与の支給者にして養い親 (misthodotas te kai tropheas)」(463b3)、即ち、雇主であり育ての親でもある訳で、そういう視点からすれば、こんどは逆に、支配者の側が民衆を補助する者 (epikouroi, 463b1) だという発想も生まれてくるのである。従って、プラトンにおいては、補助者というイメージは、兵士たちが固有の意味での支配者を補助するという意味でエピクーロイがあり、かつまたむしろ、雇主としての民衆の側を行政の執行者たちが補助——恐らく、政治に関わる専門的知識を供給することによって——するという意味でのエピクーロイの用法もあったのである。この点は、国家の一体感を共感と同感によって基礎づけようとするとき、プラトンの語法として際立った特徴となっている。この点に関する詳細は機会を改めて論じる予定である。
- (11) *Ibid.*, 416e5-8.
- (12) cf. Plato, *op. cit.*, 413e5-414a4.
- (13) 注(12)を参照。
- (14) Plato, *op. cit.*, 417a6-7.
- (15) *Ibid.*, 451c4-7.
- (16) *Ibid.*, 451c7-8.
- (17) *Ibid.*, 451d4-9.
- (18) Aristoteles, *Politica*, 1264b4-6.
- (19) アリストテレスの批判が、少なくともプラトンの描く守護者階級にかぎって言えば、妥当性を欠くことは、つとにアダムが指摘していた。cf. J. Adam, *The Republic of Plato*, vol. 1, rep. 1979, p. 281.
- (20) Plato, *op. cit.*, 451e1-2.
- (21) *Ibid.*, 451e3.
- (22) *Ibid.*, 451e4.

- (23) *Ibid.*, 451e6-7.
- (24) *Ibid.*, 452a7-8.
- (25) *Ibid.*, 452a4-5.
- (26) *Ibid.*, 452a1-b1.
- (27) *Ibid.*, 452d7-e2.
- (28) *Ibid.*, 452b7.
- (29) *Ibid.*, 450b1.
- (30) *Ibid.*, 452b7.
- (31) *Ibid.*, 452d1.
- (32) *Ibid.*, 452e4-5.
- (33) *Ibid.*, 452e6-453a3.
- (34) *Ibid.*, 453a3-4. この箇所は、部分肯定論＝部分否定論の例示と解釈しうるだろう。
- (35) *Ibid.*, 452b2-c5.
- (36) *Ibid.*, 454b4-6.
- (37) *Ibid.*, 454a5-9.
- (38) *Ibid.*, 454c2-5.
- (39) *Ibid.*, 454b7-8.
- (40) *Ibid.*, 454c8-d1.
- (41) *Ibid.*, 454d9-e2.
- (42) *Ibid.*, 455a1-3.
- (43) *Ibid.*, 455b5. ここに見える接頭辞‘eu-’と‘a-’は、規定され限定され分割される種(eidos)としての素質の「存在」と「非存在」を表示することは言うまでもない。
- (44) *Ibid.*, 455b5-6.
- (45) *Ibid.*, 455b6-8.
- (46) *Ibid.*, 455b9-c1.
- (47) *Ibid.*, 455d6-7.
- (48) *Ibid.*, 455d8-e2.
- (49) *Ibid.*, 456a10-11.
- (50) 注(4)を参照。
- (51) Plato, *op. cit.*, 450d1-2.
- (52) *Ibid.*, 450e1-2.
- (53) *Ibid.*, 456b2-3.
- (54) *Ibid.*, 456b12-c2.
- (55) *Ibid.*, 456c11-d1.
- (56) *Ibid.*, 374e4.
- (57) *Ibid.*, 376c4-5.
- (58) 加藤信朗『ギリシア哲学史』, 東京大学出版会, 一九九六年, 一五一頁。
- (59) G. Vlastos, “Was Plato a Feminist?” in, N. Tuana, ed. by, *Feminist Interpretations of Plato*, The Pennsylvania State University, 1994, p. 12.

## UNE PRÉFACE À LA PROBLÉMATIQUE QU' EST L'ÉGALITÉ DES SEXES

— Platon, *La République*, V, 449a1-457b6 —

Ikuo FUJISAWA\*

### RÉSUMÉ

Il nous semble que dans le livre V de *La République* Platon va s'engager dans l'examen des formes vicieuses de gouvernement. Mais Polémarque retient cette allusion passagère à la communauté des femmes et des enfants. Il désire une explication plus ample et la fait demander par Adimante.

Platon compare ses gardiens aux chiens berger d'un troupeau. Or, laissons-nous toujours les chiennes au logis? Ne voulons-nous pas, tout en ménageant leurs forces, qu'elles soient aussi bonnes gardeuses, aussi bonnes chasseuses, et fassent le même service que les mâles?

La femme gardienne est-elle possible? On dira à Platon: vous-même avez pour principe «À chacun sa nature (physis), à chacun sa fonction (epitedeuma)»; or, la femme est autre que l'homme par nature. Oui, en ce qu'elle enfante et que l'homme engendre. Non, pour tout le reste: plus faible en tout, et nous en tiendrons compte, elle est susceptible en tout des mêmes aptitudes ou inaptitudes que l'homme, et, comme lui, sera meilleure tantôt dans les travaux domestiques, tantôt dans la médecine, la musique, la gymnastique, la guerre, la philosophie. Ici Platon avoue que la femme gardienne elle est possible, et que aussi bien les gardiens que les gardiennes ils ont tous l'égalité parfaite des sexes.

---

\* Department of Humanities and Social Sciences